



香川県教職員連盟機関誌  
発行所: 香川県教職員連盟  
発行者: 北村 顕吾

〒760-0004  
高松市西宝町2丁目4番60号  
香川県教育会館602号

TEL (087) 835-2721  
FAX (087) 835-2723

http://www.kakyoren.com/  
E-mail: info@kakyoren.com  
毎月10日発行 定価1部50円  
(年間1,000円 送料とも)  
会員の購読費は会費の中を含む



香教連は、結成四十五年を迎えた、子供中心の教育を目指し、健全なる批判力を持つ、県内最大の教職員団体です。

# 第一回専門部会開催

五月に行われた全日本教職員連盟第一回専門部会において、令和元年度専門部活動の計画が作られた。全日教連の活動計画を踏まえて、七月十三日(土) 九時三十分より、香川県教育会館第一・二会議室において、令和元年度香教連第一回専門部会を開催した。



## 青年部

青年部では今年度のスポーツ大会の在り方について話し合った。昨年度のボーリング大会のように、たくさん先生方が参加しやすいものにしていくといった意見が出された。要望については、専科教員やスクールサポートスタッフの充実、校務支援システムの全県での統一化の早期実現を継続して要望していくこと等、様々な議論がなされた。

## 女性教職員部

女性教職員部では、今年度の要望事項について話し合った。早急な業務改善や育児短時間制度の現状や在り方、多忙感の解消により安心して出産・子育てができるような適切な人員配置の必要性等について話し合われた。

## 養護教諭部

養護教諭不在の際の対応の実態から、複数配置基準の緩和、健康診断票のデータ化等について話し合われた。また、今年度の研修についても話し合われ、幼児教育部と合同でフィジカルアセスメントや生活習慣についての研修を開催したいといった意見が出された。

## 幼児教育部

全日教連の幼児教育部部長を務めている安富教諭より、内閣府や文部科学省への要望活動についての報告を行った後、今年度の要望活動や養護教諭との合同研修の実施、待遇の改善等について議論がなされた。



## 人事対策・講師部

人事対策部・講師部は昨年度の人事異動の成果と課題について話し合った。また、教職員の働き方改革、業務改善についても協議した。さらに講師の足りなさについても話し合い、免許更新制の見直しも含めて現場でよりよく先生方が勤務ができるようにして欲しいといった意見も出された。



# 第二回会長・事務局長会 第一回執行委員会 開催



六月十五日(土) 九時三十分より、教育会館第一・二会議室において令和元年度執行部による第二回会長・事務局長会、第一回執行委員会を開催した。北村顕吾委員長の挨拶の後、新体制になって初めての会長・事務局長会、執行委員会ということもあり、各単組の役員の自己紹介を行った。その後、北村委員長より経過報告を行った。

議事の中では、本年度行事についてや組織対策・強化の必要性とその方策について議論がなされた。今年度は新規採用者の入会も多く、今後も組織の理解を進め、各単組においても更なる拡大を進めていくことを確認した。また、県教委との勤務交渉の内容検討では、スクールサポートスタッフの増配置やスクールロイヤーの配置促進、特別支援教育の更なる充実、業務改善・意識改革を早急に行う必要性等、熱心に討議した。討議した内容については、要望書に反映し、県教委に対して、強く要望していくことを確認した。

## 温故知新

来年度から小学校では、新学習指導要領が全面実施となります。高学年での英語の教科化、プログラミング教育の推進など学校現場には教育改革への対応が次々と求められています。また、教職員の働き方改革についても早急な対応・具体的な実現が迫られてきています。ただ、このような状況でも私たちは「授業」については最も注力していかなくてはなりません。そこで今回は「わかる授業」についてです。

まず「授業」では、「未知のもの」が子どもの前に置かれます。そして、それを既知のものと「置き換え」たり、既知のものから「類推」すること、一時間の授業が終わります。すると、授業の前には未知であったことが、一時間の授業終了時には既知となります。ここまでは「わかった」といえるものになっています。つまり、初めの未知はすでに既知となつていくのです。そしてこのように既知と未知の間で、「境界領域」で展開するのが「わかる授業」です。子どもが「なるほどわかった」といえる授業は、必ず既知と未知の境界領域で成立しています。それも既知と未知の間の溝が、あまり深くないところで成立します。ちょっとした溝を、子どもたちの力で飛び越えさせること(仕掛け)が大切なのです。「わかる授業」は、そういう構造をもつていきます。

次に、子どもが「わかる」ためのスタートは、わがわがとするものごとと「対面する」というところにあるのです。学校という場で子どもたちは次の三つの対面を実現しなければなりません。①先生のほうを向く②学習内容(教材や教科書など)を見る③自分以外の児童生徒が言ったり、表現したりしていることを見聴きすることです。英語で「わかる」は「アンダースタンド」ですが、この意味は本来「目の前に据える」「目の前に置いて対象化すること」だそうです。内容をわがわがと思うならば、学習内容(教材や教科書など)を目の前に据えない限りわかりようがないということなのです。

日々の学級経営や授業において、ものごとにつきかりと自分の目を向けるように習慣づける指導や、他者の考えや思いをまずは受け入れ認知し、そこから自分の考えや思いを比較し表現、発信していくことがいつも繰り返して展開される環境づくりに日々徹していくこと、そして準備(意識や物理的なことなど)を怠らないことが重要であることを学ばせていただきました。